

2021年 5月 16日(日) 関東学院教会 主日礼拝 説教要約

説教「種を蒔く」 マタイによる福音書 13章1-23節 高橋彰

◆「種を蒔く人」のたとえ

13 その日、イエスは家を出て、湖のほとりに座っておられた。2 すると、大勢の群衆がそばに集まって来たので、イエスは舟に乗って腰を下ろされた。群衆は皆岸辺に立っていた。3 イエスはたとえを用いて彼らに多くのことを語られた。「種を蒔く人が種蒔きに出て行った。4 蒔いている間に、ある種は道端に落ち、鳥が来て食べてしまった。5 ほかの種は、石だらけで土の少ない所に落ち、そこは土が浅いのですぐ芽を出した。6 しかし、日が昇ると焼けて、根がないために枯れてしまった。7 ほかの種は茨の間に落ち、茨が伸びてそれをふさいでしまった。8 ところが、ほかの種は、良い土地に落ち、実を結んで、あるものは百倍、あるものは六十倍、あるものは三十倍にもなった。9 耳のある者は聞きなさい。」

◆たとえを用いて話す理由

10 弟子たちはイエスに近寄って、「なぜ、あの人たちにはたとえを用いてお話しになるのですか」と言った。11 イエスはお答えになった。「あなたがたには天の国の秘密を悟ることが許されているが、あの人たちには許されていないからである。12 持っている人は更に与えられて豊かになるが、持っていない人は持っているものまでも取り上げられる。13 だから、彼らにはたとえを用いて話すのだ。見ても見ず、聞いても聞かず、理解できないからである。14 イザヤの預言は、彼らによって実現した。

『あなたがたには聞くが、決して理解せず、見るには見るが、決して認めない。15 この民の心は鈍り、耳は遠くなり、目は閉じてしまった。こうして、彼らは目で見ることなく、耳で聞くことなく、心で理解せず、悔い改めない。わたしは彼らをいやさない。』

16 しかし、あなたがたの目は見えているから幸いだ。あなたがたの耳は聞いているから幸いだ。17 はっきり言うておく。多くの預言者や正しい人たちは、あなたがたが見ているものを見たかったが、見るのができず、あなたがたが聞いているものを聞きたかったが、聞けなかったのである。」

◆「種を蒔く人」のたとえの説明

18 「だから、種を蒔く人のたとえを聞きなさい。19 だれでも御国の言葉を聞いて悟らなければ、悪い者が来て、心の中に蒔かれたものを奪い取る。道端に蒔かれたものとは、こういう人である。20 石だらけの所に蒔かれたものとは、御言葉を聞いて、すぐ喜んで受け入れるが、21 自分には根がないので、しばらくは続いても、御言葉のために艱難や迫害が起こると、すぐにつまずいてしまう人である。22 茨の中に蒔かれたものとは、御言葉を聞くが、世の思い煩いや富の誘惑が御言葉を覆いふさいで、実らない人である。23 良い土地に蒔かれたものとは、御言葉を聞いて悟る人であり、あるものは百倍、あるものは六十倍、あるものは三十倍の実を結ぶのである。」

聖書 新共同訳(C) 日本聖書協会 Japan Bible Society, Tokyo 1987,1988

イエスは、神についての教えを山上の説教のような教訓的な言葉でばかりでなく、譬え(パラボレー)や物語の方法を用いて、聞く者たちの生活に身近な題材や具体的な状況を取り上げることで、より印象深く、さまざまな感情を聞き手に呼び起こさせ、想像を豊かに広げさせ、心に残るような仕方でも語られました。特に神の国(マタイでは神という語を用いないようにするため「天の国」と書かれました)について、目には見えない天の国について深く思いめぐらすことへと導くような譬えを用いて語られました。

マタイによる福音書は13章に譬えを集めていますが、最初の「種蒔きの譬え」が「天の国」についてと書かれていない点は興味深いです。この世の現実、状況において神を信じて生きることを促すことから始め、譬えを重ねて読む(聞く)ことを通して、24節以降からは天の国を想起することへとつなげようとしているかのようです。

種蒔きの譬えは、譬えそのものと、その後イエスが弟子たちに解き明かしをしている点が特徴です。後半の解説部分は聖書学の研究成果では、福音書が書かれた初代教会の人びとがイエスの教えを自分たちの状況において解釈し、解き明かされながら伝承されていた背景が反映されていると見なされています。律法を信じて頼りにしていた人びとがイエスの福音に触れ、「天の国の秘密」を「悟り」(13:11)、その到来を熱心に切望していました(6:10)。「御国の言葉を聞いて悟り」(13:19)、律法を完成する(5:21)新たな「教え」をしっかりと心に刻んで生きようとしていたのでしょう。「悟る」はこの箇所でも17回用いられる重要な言葉です。教えを頼りに「艱難や迫害」(21)に遭う中で、「世の思い煩いや富の誘惑」(22)が心を占めそうになりながらも、み国を切望して生き抜こうと、この種の譬えが信仰に生きるための励まし、指針となっていただろう。そうしたことを思いながら、今一度、イエスの譬えに立ち戻って、わたしたちも考えてみたいと思います。

種蒔きのたとえには「種」という言葉は一度もなく、「種を蒔く」という動詞と「蒔いたもののうちのいくつか」と書かれています。腕を大きく振りかざして種を散らす、という動作です。その後の耕作の行為も出て来ず、

蒔く姿に集中させています。畑の外にこぼれ落ちるものがあります。「落ちた」は下降、恐怖や死などの不穏な意味も含み合わせる語です。不条理で困難な状況下で生きねばならず、理不尽な苦難を負う「蒔かれたもの」に人びとは自分たちのいのちの有り様を想像させられたことでしょう。「道端」に落ちて、根付くことができずに、無残に鳥に食べ尽くされてしまういのち。福音書には道端に座らされていた人も登場します(20:29-)。「石だらけで土の少ない所」。どんなに必死になろうとも、得られる養分は少なく枯渇し、太陽に象徴される力、威力に焼かれ、枯れてしまういのち。「茨の間」で「ふさがれる」もの。どんなにもがいても押しつぶされ閉じ込められ、茨に刺されているいのち。どれも種が苦しめられてひどい目にあっている描写が切実になされています。「良い土地」に落ちたと思われたものはどうか。豊かに実りをもたらすとありながらも、ひしめき合って競うように収穫をあげている光景には、それを喜び、それで本当に利するのは誰かということも想像させられます。イエスが、屋外で、ガリラヤの畑や湖を視野に置きながらガリラヤの民衆に語られ、投げて蒔かれた種のように、人びとのいのちが投げ落ちられるように生きる現実を人びとに悟らせたとき、民衆は命の現実を鋭く見抜かれて驚かされたことと思います。「譬え」は隠されていたものを明らかに示す力を持つものだからです。そして自分たちのいのちの叫び声をあげ、イエスを仰ぎ見たのではないかと想像します。わたしたちは自分たちが種として善い地に落ちて実り豊かになることを想像したり、後半の解説から推察して「御国の言葉」を聞いて悟り、自らにおいて豊かに実らせる心の霊的な土壌を耕そうと教えられます。イエスは「良い土地」どころか、それ以外のところに落ちた種を拾い上げるかのように巡り歩かれました。道端に座る人を立ち上がらせ、棘に刺される人びとの救いのために自ら茨の冠をかぶせられ、十字架につけられました。しかし、そのように一粒のいのちにこだわった方のいのちが、わたしたちに豊かないのちとは何かをを悟らせ、そのように生きることへと促し、実を結ばせるのです。